

**県立下田高等学校**  
**「行きたい学校づくり」推進事業**

**【ICT活用による教育手法】**

**令和7年度 年度末報告書**

1 <成果指標と実績>

<成果指標と実績>					
成果指標	R6当初 初期値	R8末 目標値	R6年 実績	R7年 実績	R8年 実績
①授業内容に興味があつて学校を選出した生徒の割合 (%)	下田(全) 63% 下田(定) 67% 南伊豆分校 84% 松崎 69% 稲取 73%	下田(全) 70% 下田(定) 70% 南伊豆分校 85% 松崎 80% 稲取 75%	下田(全) 77% (定) 78% 南伊豆分校 91% 松崎 46% 稲取 75%	下田(全) 77% (定) 88% 南伊豆分校 87% 松崎 33% 稲取 81%	
②(授業以外の)指導内容に興味があつて学校を選出した生徒の割合 (%)	下田(全) 95% 下田(定) 89% 南伊豆分校 64% 松崎 83% 稲取 93%	下田(全) 95% 下田(定) 90% 南伊豆分校 65% 松崎 90% 稲取 90%以上維持	下田(全) 84% (定) 100% 南伊豆分校 87% 松崎 89% 稲取 92%	下田(全) 77% (定) 100% 南伊豆分校 77% 松崎 100% 稲取 95%	
③志願倍率	下田(全) 普通1.05 理数0.35 下田(定) 普通0.175 南伊豆分園芸0.65 松崎 普通0.45 稲取 普通0.99	下田(全) 普通1.05 理数1.0 下田(定) 普通0.2 南伊豆分園芸0.7 松崎 普通0.6 稲取 普通1.0	下田(全) 普通0.93 理数0.65 下田(定) 普通0.23 南伊豆分校園芸0.55 松崎 普通1.03 稲取 普通0.74	下田(全) 普通1.00 理数0.88 下田(定) 普通0.23 南伊豆分校園芸0.75 松崎 普通0.40 稲取 普通0.98	

2 学校や地域の特徴を生かした取組

- 将来構想検討委員会の設置による学校間連携**では、「4校連携委員会」を「将来構想検討委員会」と改め、部会を整理した。遠隔を用いた会議やハイブリッドでの会議などを積極的に行った。各部会長と管理職とがゴールイメージを共有するための管理運営部会を定期的に行った。また、各学校の理解を深めてもらうため、中学生に対し合同個別相談会を賀茂地区内の3会場で実施した。
- キャンパス制に向けた準備**として、賀茂地区内での学校間連携や、遠隔授業をさらに研究する目的で、7月15日～17日にかけて新潟県への視察を行った。
- 遠隔授業の試行**では、学校間連携による遠隔授業として、夏季補講(物理2回)、秋季補講(情報3回)、冬季補講(情報1回)を下田高校と松崎高校、下田高校と稲取高校で実施した。
- 合同による部活動**では、5部活動(野球・サッカー・吹奏楽・陸上競技・弓道)において、合同部活動または合同チームとして、申請を行い、練習や大会などの取り組みを試みた。吹奏楽部はオンラインを用いたミーティングを行った。
- 生徒間交流**では、南伊豆分校の「農業クラブプロジェクト発表会」を1月13日に遠隔を利用して3校とつないだ。双方向的な交流を試み、遠隔による生徒同士の質疑や、教員の講評などを行った。
- 探究活動の充実**では、下田高校の探究の授業では地域の講師12人と教員がGoogle Chatでつながり、教育課程内の探究活動において、学びのフィールドを校内から地域へ広げる取り組みに挑戦した。



3 特徴的な取組における成果(生徒、学校、地域の変容等) ※(1)～(6)は2の内容に対応

- 委員会などの見直しと運営方法の改善

### 様式第3号

・これまで以上に機動的で効果的な会議の実施ができた。4校が関わる様々な会議をオンライン8回、ハイブリッド5回、対面13回行い、キャンパス制開始に向けた話し合いを充実させることができた。

・4回の管理運営部会の開催により、各部会長がゴールイメージを明確に持ち、各部会が主体となって会議運営をすすめた。また、部会ごとが有機的に結びつくだけでなく、各部会が自律的に機能した。

・開催の時期や方法等、次年度以降工夫して賀茂地区の高校の教育内容や魅力、キャンパス制についての説明の機会を設けたい。



#### (2) 先進校視察

・佐渡市内の2校及び新潟県教育委員会を視察し、学校間連携による遠隔授業について情報を得た。また、CORE ハイスクール事業終了後の資源の活用のありかたについての知見を得た。

#### (3) 遠隔授業

・生徒の理解度を把握するために、少人数で実施することが効果的であることが検討できた。成果として、受験のための演習では、遠隔による補講が効果的であるという示唆も得られた。さらに、専門教科の教員不足を補うことにも期待ができる。

#### (4) 合同による部活動

・技術力のある生徒との交流ができたことで、お互いに刺激となった。また、通う学校に部活動がなく諦めていた活動に参加することができ充実した。

・部員の人数的な不足を補うことができ、活動などを充実させることができた。

・教員は、兼務が可能になることで、部活動以外の業務にも時間を割くことができた。

・野球、サッカーは週2回程度の定期的な練習を、吹奏楽は7回の活動・演奏会参加・オンライン会議を、陸上競技は4日間の通いによる合同練習会を実施し、生徒の活動を充実させた。

#### (5) 生徒間交流事業の試行

・昨年度は、遠隔配信を各学校の教員が視聴する形態であったが、今回は、発表会のリハーサルを遠隔でつなぎ、3校の生徒が発表を聴き、質疑応答も行った。発表内容はもちろんのこと、遠隔を用いて実施することで資料など鮮明で、発表が分かりやすくICTを活用する強みを確認できた。次年度は、さらに多くの生徒が関わる企画としての工夫を研究したい。

#### (6) 探究活動を通じた地域連携

・ICTを活用しての取り組みであった。現在のセキュリティーでは、生徒と講師がGoogle Chatを用いて連絡ができない。今後生徒も連絡が可能となる、システムや安全面での工夫が課題として考えられる。

### 4 ゴールイメージの実現に向けた課題

#### (1) 遠隔授業について

・効果的な遠隔授業とするための日程調整や実施科目の選定をいつ、どのようなタイミングで行うのが今後の課題となる。どのような調整が必要となるかを次年度検討していきたい。

#### (2) 合同による部活動について

・移動方法やそれに要するコストが課題となる。また、兼務となっている相手校生徒の安全管理について、怪我や自然災害の警報が発表された場合など、保護者との連絡手段などの課題が明確となった。

#### (3) 生徒間交流の充実

・学校規模縮小に伴い集団規模の確保を目的とした生徒間交流を、遠隔補講、部活動、発表会に加え魅力的な行事の検討を続ける。その際、各学校の年間行事のすり合わせとハード面での設備投資が次年度の課題となる。

### 5 事業終了後も自走化するための具体的方策

#### (1) 最大公約数的な取り組みの充実

・学校規模の縮小で、生徒数、教員数の減少が見込まれる中で、これまで各学校が培ってきた取り組みをいかに学校間連携として広げ、その魅力を残すかということを検討する。どのようにして限られたマンパワーで学校間に広げるかを、組織的な側面も踏まえて引き続き研究していく。

#### (2) ハード面とソフト面の充実

・本事業を通して、自走可能となるための機材等の充実を引き続き検討する。また、授業や会議などにおいて遠隔を効果的に活用するための教員の活用スキル向上なども、学校間で研修を重ねるなどして、その成果を共有し、年度をまたいでも伝承していくことが必要である。